

5. 反町遺跡第1・2号祭祀跡をめぐって

はじめに

本稿では反町遺跡第1号祭祀跡、第2号祭祀跡として報告した河川祭祀について、事実関係の整理と問題点について若干の検討を加えたい。また、旧稿（富田・赤熊2006、富田2007）では、S D36から出土した「大形籠」について祭祀跡との関連性を想定したが、籠及び伴出した縄の年代測定の結果中世に降る可能性が高まったため、祭祀跡関係遺物からは除外した（註1）。

（1）第36号溝跡第1号祭祀跡について

概 要

反町遺跡B区から検出された3条の大溝跡（北からS D48・S D3・S D36）は、第3次調査の成果を援用すると、蛇行する同一河川流路跡の可能性が高まった。第36号溝跡（S D36）は調査時には北西から南東方向に流路を採る河川で、正確な溝幅は不明であるが15～20m前後と推定された。北岸汀線の一部は古墳時代前期から古墳時代後期、奈良・平安時代と時代を降るに従って南西側に移動したことが判明した。奈良・平安時代汀線の内側（河川内）に約1～3m入った地点に9点の須恵器坏・碗と1点の須恵器長頸瓶が岸に沿って並んだ状態で検出された。坏の1点には外底面に「弓」、碗の見込み部には「神矢」の墨書土器が記されていた。S D36河川流路内の調査を実施したところ、須恵器とほぼ同時期と思われる雁股鏃が3点出土した。3点の雁股鏃は墨書土器の内容から「弓」で射放たれた「神矢」に想定することが可能であり、墨書土器の内容と出土遺物が具体的に連関する稀有な例となろう。

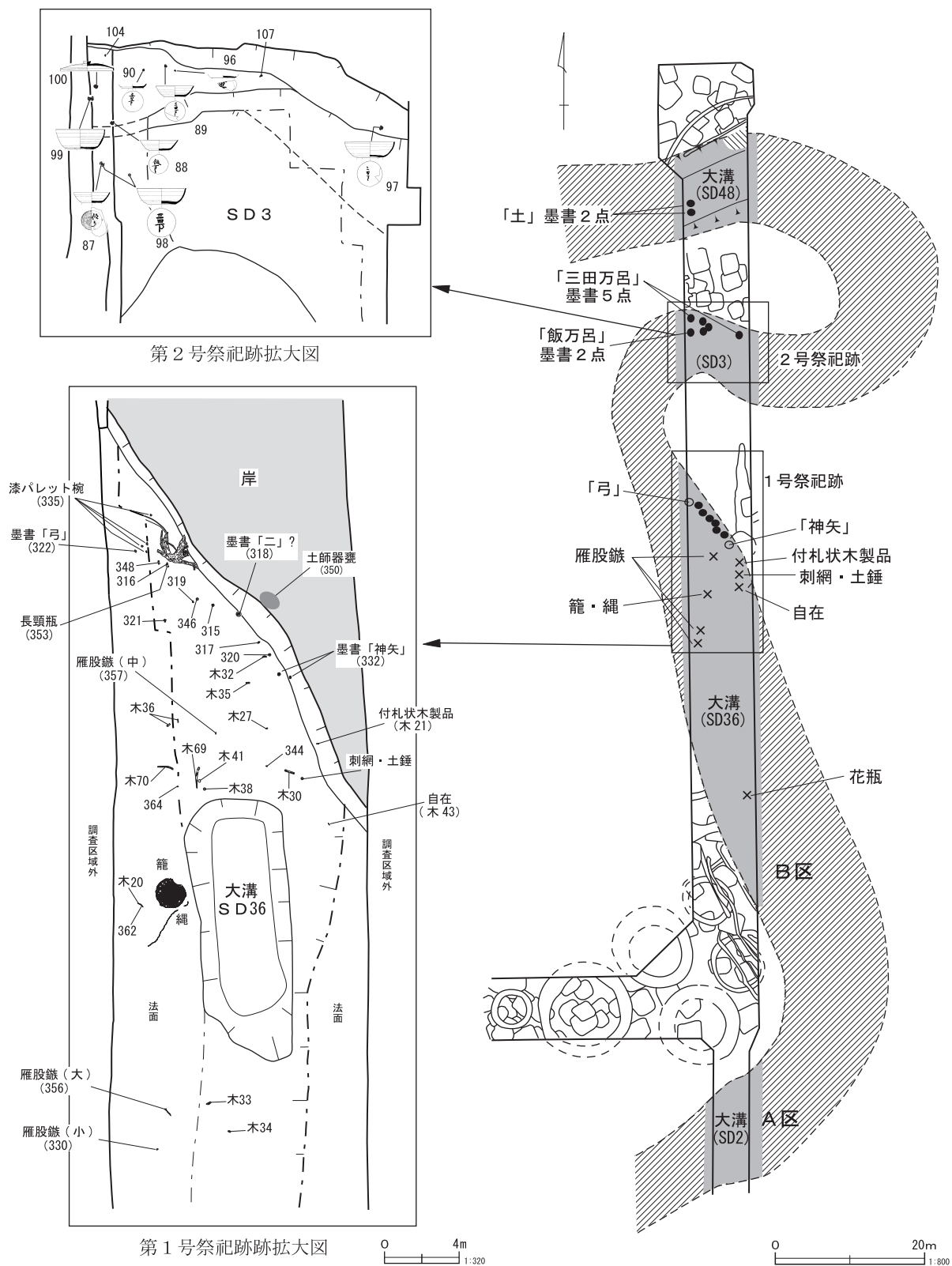
出土状況

S D36北岸出土の祭祀土器群は斜面に位置するため、必ずしも原位置を留めているとはいえないが、完形品または遺存率が高い土器が多いことと正位置で出土したものが多くことから、岸からの投棄や二次的な流入ではなく、本来意識的に据え

置かれた可能性が高いと判断した。横位や逆位で出土したものについても、本来の位置から大きく移動したとは思われない。

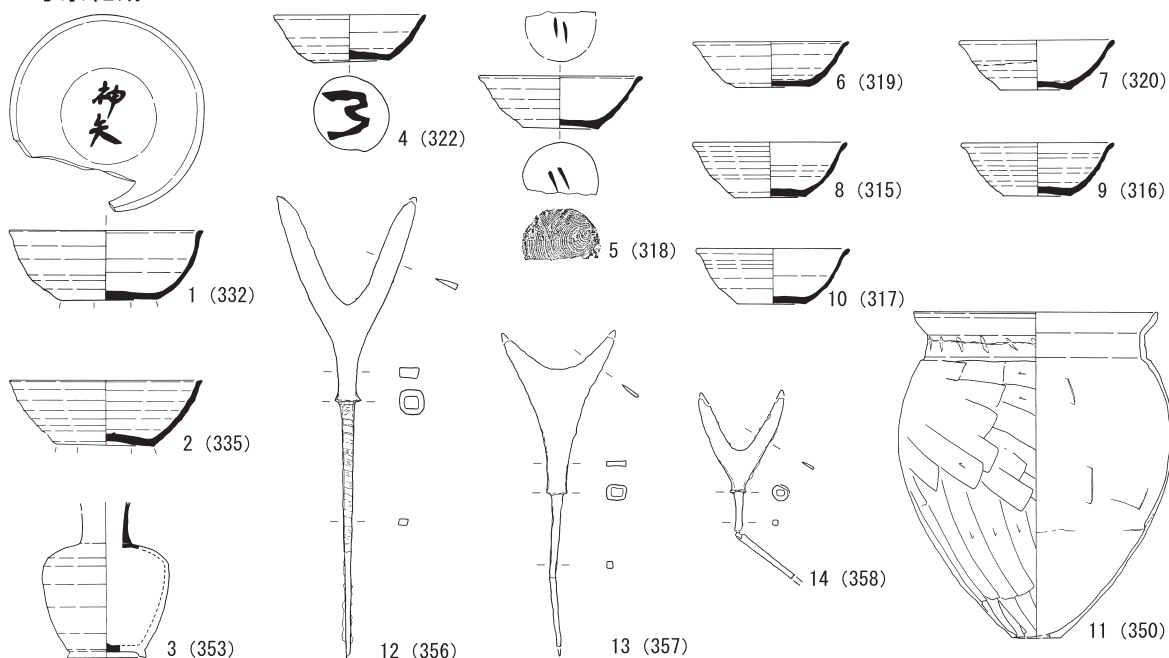
北西側から南東に向かって列挙すると、①322坏（完形・「弓」墨書・正（斜）位）、②335碗（破片・漆パレット）、③353長頸瓶（口縁部欠・横位）、④316坏（完形・逆位）、⑤319坏（完形・横位）、⑥315坏（ほぼ完形・正位）、⑦318坏（破片・正位・「二」墨書）、⑧317坏（完形・横位）、⑨320坏（完形・正位）、⑩332碗（口縁部欠・「神矢」墨書・正位）となる。特徴は北西隅に「弓」、南東隅に「神矢」の墨書土器を配置し、長頸瓶以外は供膳器で占められることである。「大□「門」」墨書の記された坏321は岸から3.60m離れ、他の土器群よりも位置的にも時期的にも若干隔たりがあることから、祭祀土器の一群からは除外しておく。岸辺からは土師器甕（第205図350）が1点出土した。調査工程の都合上グリッド出土遺物として取り上げてしまったため、正確な位置はプロットできないが、P-66グリッドで出土した（第202図中概ね網掛けの範囲）。他には同時期の土師器甕は出土しておらず、祭祀跡に伴う可能性が高いと判断した。

雁股鏃は3点あり、いずれもS D36河川流路内から出土した。中形の鏃第206図357はS D36岸から最短距離で5.60m入った位置から出土した。大形の鏃第206図356は岸から最短距離で19.20m入った位置から出土している。356は矢柄（第206図360）に鏃茎部が挿入された状態で出土した（巻頭図版7）。因みに、矢柄の樹種はタケ亜科で、AMS年代測定により補正年代1150±30BP、暦年較正年代calAD784-968という年代が示されている（第Ⅵ章参照）。小型鏃はSD36中央部付近から茎部が折れ曲がった状態で検出された。北岸からの距離は約24.0mである。

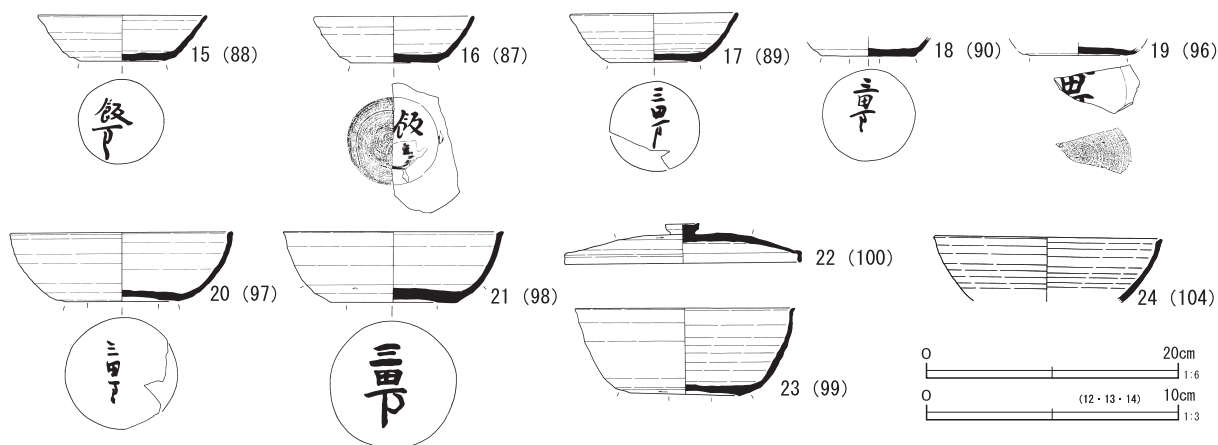


第281図 第1号・第2号祭祀跡概念図

第1号祭祀跡



第2号祭祀跡



第282図 第1号・第2号祭祀跡出土遺物

年代

祭祀の年代を絞るために、出土土器年代の検討から始めたい。第1号祭祀跡出土須恵器は全て南比企産である。南比企産須恵器編年研究は、酒井清治（酒井1987他）と鳩山窯跡群の調査成果に基づいた渡辺 一（渡辺1988・1990・1991・1992他）両氏によって主導されてきた。殊に渡辺氏の研究は膨大な鳩山窯跡群調査資料をベースにしており、その後の研究に大きな影響を与えた。ここでは、渡辺編年をベースに土器年代を探っていきたい。

まず、須恵器坏は7点あり、いずれも底部回転糸切りで再調整はない。法量を確認すると口径11.8～12.6cm、底径5.3～6.0cm、器高3.6～4.3cmである。口底指数（底径／口径×100）は44.54～50.85、径高指数（器高／口径×100）は29.8～36.1に分布する。平均法量は口径12.0cm、底径5.7cm、器高4.0cmである。口底指数の分布から判明するように、底径が口径の1/2を切り、渡辺編年HⅧ期に軸足を置くことは間違いない。

HⅧ期の基準資料である広町B5号窯(以下H

B 5 号窯と呼称する)の坯平均値は口径12.3cm、底径5.8cm、器高3.7cmとなる。口底指数は第1号祭祀跡が47.1、HB 5 号窯のそれは47.3とほぼ近似した数値となる。径高指数は第1号祭祀跡が33.6、HB 5 号窯が30と第1号祭祀跡の方がより「深身」に偏していることがわかる。第1号祭祀跡出土坯を観察すると器形上、浅身・偏平な器形を呈する一群と深身の一群に分けられる。前者は「弓」墨書の記された322と319・320の3点、後者は315・316・317・318の4点である。

前者は径高指数29.8～32.5を示す。坯322は口底指数が唯一50を上回っており、これらの土器群の中では最も古い様相を示す。鳩山窯跡群ではHⅦ期に位置付けられる広町B 6 A号窯が参考となる(第283図)。HB 6 A号窯の須恵器坯は浅身と深身の二者があり、浅身の一群は口縁部の外反が弱く、口底指数51.0と器形・法量共に坯322と良く類似する。先述したHB 5 号窯にも浅身の一群があり、法量的には類似するものも認められる。口縁の外反やHB 5 号窯の平均口底指数(47.3)から見るとHB 6 A号窯により様相的には近いといえそうであるが、ひとまず、HB 6 A号窯段階からHB 5 号窯段階に位置付けることが可能である。この浅身の坯3点はいずれも使用による摩滅が顕著に認められ、特に「弓」墨書の322は使用痕が目立つ点は注意してよい。

一方、深身の器形を呈する後者の4点は器高が4.2～4.3cm、径高指数33.3～36.1を示し、深身化が進行すると共に、口縁部の外反が顕著になっている。浅身の一群との違いは、摩滅が殆どなく使用痕があまり認められない点である。特に315・316・317は器形や法量、色調も酷似しており、同一窯から一括供給された坯が、ほとんど未使用の状態ですら祭祀に供された可能性が高い。

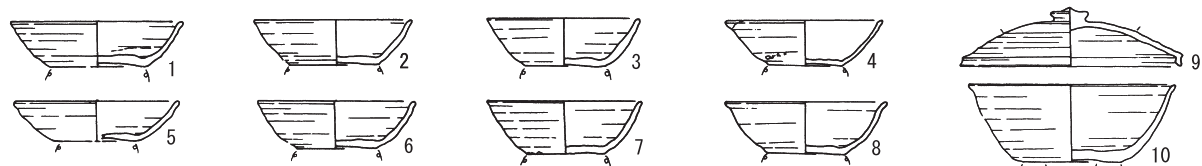
法量的にはHB 5 号窯・柳原A 1号窯の平均径高指数30.0を凌ぐ。南比企窯跡群中の山下5号窯(金井塚1990)の径高指数32.2に近い(註2)。H

Ⅸ期とされる境田1号窯(金井塚1990)ほど底径の縮小化は進んでおらず、HⅧ期の範疇で捉えてよいと思われる。

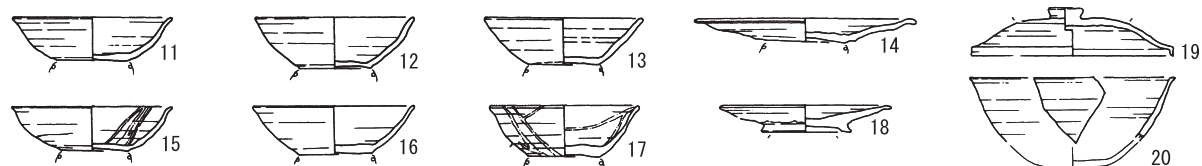
「神矢」墨書が記された無台碗332と漆パレットとして使用された335は、いずれも底部再調整が施されている。法量は口径15cm、底径7.5cm前後、器高は5.2～5.6cmと底径の縮小が進んだ段階のもので、HⅤ期以前に遡らせることはできない。いずれも「浅碗」の系譜下にあり、332は器壁が薄く口唇部内面の内傾面が失われている。HⅦ期のHB 6 A号窯(第283図10)が類例として挙げられよう。335は口唇部の面取りと底部再調整に古制を認めることができるが、底径の縮小化に新出の様相がみられる。良好な類例を示せないが、柳原A 1号窯の無台碗(第283図29)に連なると考えることもできる。HⅧ期になると深碗が主体を占め、底部再調整も非常に少なくなること、底径が小さくなることを考慮すると、HⅦ期が相当と思われる。

小型の長頸瓶353は口縁部を欠き、全形は不明である。肩部の張りは比較的強、南比企産である。良好な類例に乏しいが、東松山市山王裏遺跡8・9号住居跡から口縁部破片が出土している(山本1991)。同住居跡は9世紀前半を中心とした土器群からなり、雁股鋳が出土する点でも参考になる。土師器甕はいわゆる「コ」の字状口縁甕である。胴部の張りは強く、短胴化している。武蔵型甕の変遷を示した鈴木徳雄の検討(鈴木1983)に従えば、甕13類期に相当しようか。山王裏遺跡の土師器甕(第283図14)はやや長胴で、口縁部の屈曲が弱いことから本例よりもやや古相といえる。山王裏遺跡の須恵器坯は第1号祭祀跡出土よりも確実に古く、HⅥ～HⅦ期相当と考えられる。集落出土資料では坂戸市木曾免遺跡第2号住居跡が参考になる。糸切り後無調整の須恵器坯に深身と浅身の二者があり、口唇部面取りがやや退化した無台碗と、「コ」の字甕を伴っている(篠田2008)。

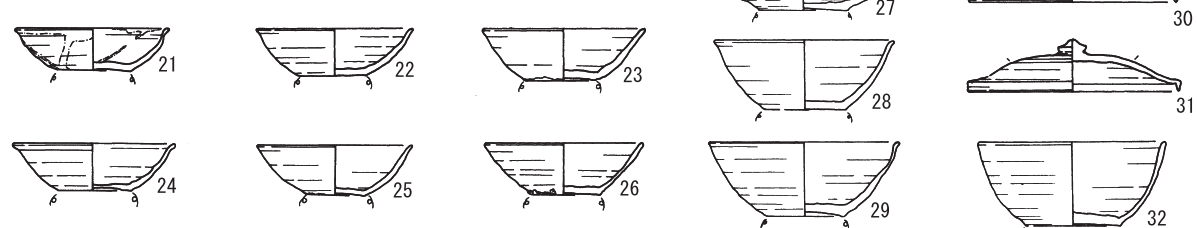
鳩山窯跡群広町B6A号窯



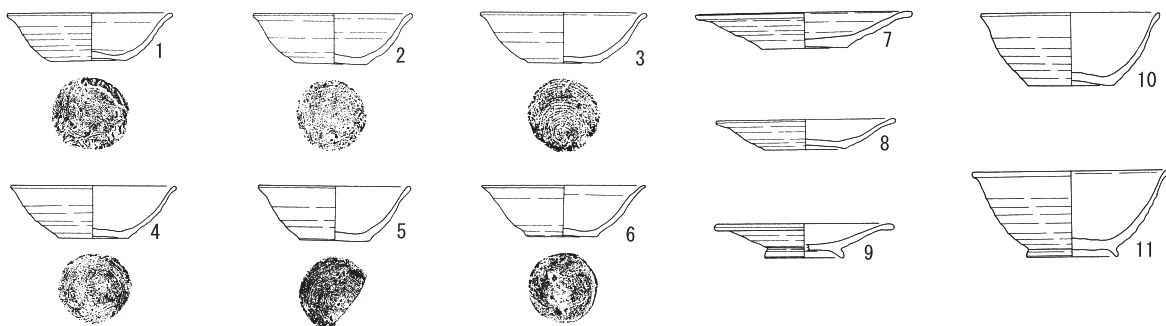
鳩山窯跡群広町B5号窯



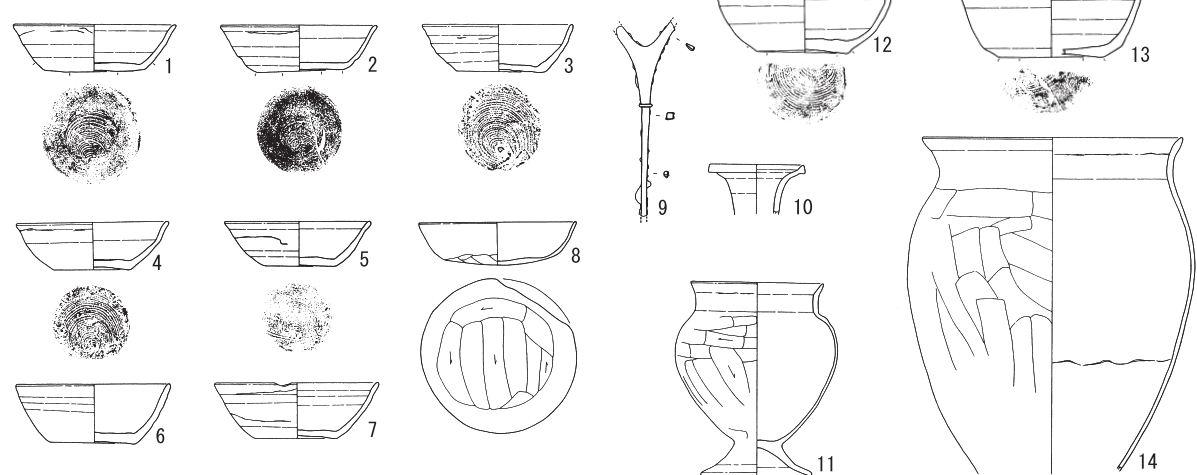
鳩山窯跡群柳原A1号窯



山下窯跡第5号窯



山王裏遺跡第8・9号住居跡



0 10cm
1:6

第283図 参考資料1

以上、土器の検討からはHⅦ期～HⅧ期という年代幅の中に収まるようだ。土器群が複数回の祭祀行為の累積なのか、一時期（一回）の祭祀行為の結果なのかは不明確であるが、もし一時期の祭祀とするならば、摩滅痕のない深身の坏と「コ」の字状口縁甕を基に、HⅧ期に位置付けられよう。推定年代は9世紀3/4期～4/4期に相当する。

墨書土器について

墨書土器は「神矢」と「弓」、不明墨書「□（二カ）」がある。神社遺構を検討した井上尚明の集成に拠れば県内の「神」の墨書土器は行田市長野中学校校内遺跡第2号住居跡（斉藤1980）、小敷田遺跡4区158号土壇・4区第52号溝跡（吉田1991）、伊奈町大山遺跡A区第56号住居跡（谷井1979）、鶴ヶ島市羽折遺跡第5号住居跡（斉藤2001）、「神主内」墨書土器が深谷市（旧岡部町）熊野遺跡43次第1号住居跡（宮本2002）・C区第26号住居跡（富田2003）から出土している（井上2001）。「神矢」の墨書土器は類例が拾えなかった。小敷田遺跡4区52号溝跡からは「神」の墨書土器（9世紀）と共に「矢久」の墨書土器（8世紀後半か）が出土しているが、時期差が明白であり、共伴資料とはいえない。「弓」は吉見町西吉見条里Ⅱ遺跡の古代道路跡からの出土例がある（永井2002）。「神矢」と「弓」がセットで出土したことに意味があり、矢と弓を使用する「神事」が執り行われたと理解するのが自然な解釈であろう。

鉄鏃について

S D36から出土した鉄鏃は4本あり、その内3本は雁股鏃であった。また、第3次調査区のS D48からも雁股鏃が1本検出されている。S D48はS D36と同一流路の可能性が極めて高い（註3）。5本の鉄鏃のうち、4本が雁股鏃ということになり、意図的に選択された可能性が極めて高いと判断される。特筆されるのはそのうちの1本（356）には矢柄が装着されていたことである。矢柄は分析によりタケ亜科ということが判明し、単なる鉄

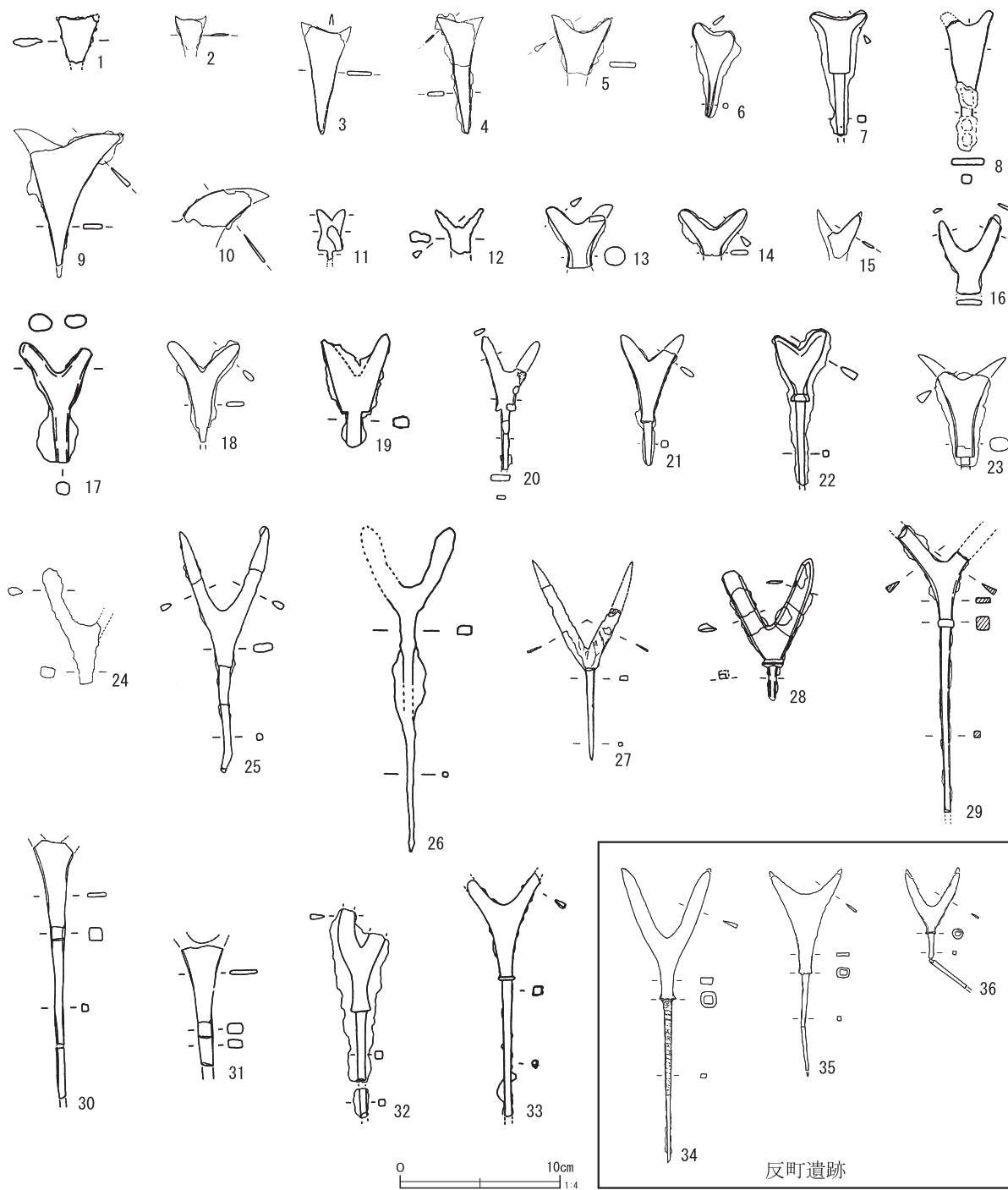
鏃ではなく、「矢」として機能したことが確定した。また矢柄を年代測定したところ、暦年較正年代calAD784-968という結果が得られた（第Ⅵ章参照）。出土土器の年代（9世紀後半）とも整合的であるが、長岡京期～平安時代10世紀後半という年代幅では長きに過ぎ、限定材料に使うには難があるといえよう。また、年代の想定される資料は1点のみであり、他の2点については時期の限定が難しい。

3点の雁股鏃はいずれも大きさ・形態が異なる。356は長さ18.4cm、鏃身長8.2cm、鋒幅5.6cm、茎部長8.2cm。大型・刃部の挟りが大きいのが特徴で、台状関が付く。357は中型で長さ12.2cm、鏃身長6.2cm、鋒部幅4.4cm、茎部長6.0cm。刃部の挟りはやや浅いのが特徴である。篋被は台状関である。358は小型で長さ8.2cm、鏃身長3.7cm、鋒部幅3.4cm、茎部長4.5cm。刃部の挟りは大きく、鐔状の環状関が付く点に特徴がある。

タイプの異なる3本の雁股鏃が、土器の検討から得られた9世紀後半という年代観に合致するのかが検討するため、埼玉県内出土の雁股鏃を検索した結果、本遺跡例を含め51例を拾うことができた（第86表、第284図）。

全国的に見ると、奈良県寺口忍海古墳群H-18号墳出土例から6世紀前半（MT15型式）には既に出現していることがわかる（千賀1988）。県内資料では蓮田市椿山遺跡第3号古墳跡周溝出土例がある。伴出土器は6世紀前半であるが、確実に伴うか不明という（寺内1989）。8世紀初頭以降集落出土例が認められ、9世紀以降出土例が増加する。形態のバリエーションが豊富で、一系的な形態変化を想定することはできない。

鉄鏃の分類と編年研究は、後藤守一（後藤1940）・末永雅雄（末永1941）の研究を嚆矢に、平野 修（平野1989）、津野 仁（津野1990）、飯塚武司（飯塚1991）諸氏によって進められてきた。県内ではさいたま市（旧大宮市）氷川神社東遺跡



第284図 県内出土雁股鏃集成図

他から出土した雁股鏃を分析した関 義則の研究がある（関1993）。分類要素は鋒の形態と抉りの深浅、刃部幅を軸に、関の形態・大きさなどがある。今回は、これらを参考に抉りの深浅を基本にⅠ類抉りの浅いもの、Ⅱ類抉りのやや浅いもの、Ⅲ類鋏状に深く抉りが入るもの、Ⅳ類その他に分

け、その中を a 類無関、b 類段関、c 類台状関、d 類環状関、大きさから①類小型品（刃部幅 4 cm 未満、または長さ 10 cm 未満）、②類中型品（刃部幅 4 cm ～ 6 cm、または長さ 10 cm ～ 15 cm）、③類大形品（刃部幅が 6 cm 以上、または長さ 15 cm 以上）に分類した（註 4）。

第86表 埼玉県内出土の雁股鋌一覧表

No.	遺 跡 名	遺 構 名	所在地	時 期	関型式	長さ	分類	図番号	備考
1	反町 1・2 次	SD36	東松山市	9 世紀後半	台状関	18.4	Ⅲ c	34	未報告
2	反町 1・2 次	SD36	東松山市	9 世紀後半	台状関	12.2	Ⅱ c	35	
3	反町 1・2 次	SD36	東松山市	9 世紀後半	環状関	8.2	Ⅲ d	36	
4	反町 3 次	SD48	東松山市		台状関		Ⅲ c		
5	山王裏	8・9 号住居跡	東松山市	9 世紀前半	環状関	15.1	Ⅲ d	33	未報告
6	前領家		桶川市		台状関		Ⅲ c		
7	戸崎前 (7～10次)	SK338	伊奈町	報告では近世	環状関	8.5	Ⅲ d	28	
8	馬込五番		岩槻市	中・近世	無関	3.7	Ⅳ a		
9	馬込五番		岩槻市	中・近世	無関	4.3	Ⅳ a		
10	八木崎	21号住居跡	春日部市	8 世紀 2 / 4	台状関	7.5	Ⅰ c	7	
11	愛染	H30号住居跡	神川町	10世紀後半	段関	7	Ⅱ b	19	
12	愛染	H35号住居跡	神川町	10世紀後半	無関	7.3	Ⅱ a	17	
13	中堀	220号住居跡	上里町	9 世紀中頃	不明	3	Ⅱ	14	
14	中堀	区画溝11	上里町	9 世紀後半	台状関	8.2	Ⅱ c	21	
15	中堀	表採	上里町	不明	台状関	5.8	Ⅱ c	23	
16	龍光第 4	確認面	川越市	不明	台状関	6.2	Ⅲ c		
17	騎西城跡		騎西町	近世	無関	6	Ⅳ a		
18	騎西城跡		騎西町	近世	無関	5.2	Ⅳ a		
19	多賀谷氏館跡	4 次 4 号土塋	騎西町	12～13世紀	環状関	10.5	Ⅲ c		
20	飯塚北	SK554	熊谷市	9 世紀後半	不明	3.8	Ⅱ	13	
21	諏訪木	河川跡 C 地点	熊谷市	古墳～奈良・平安	台状関	11.6	Ⅲ c	27	
22	一本木前	29号住居跡	熊谷市	10世紀後半	環状関 ?	19.7	Ⅲ d ?	26	
23	氷川神社東・氷川神社・B-17号	H 4	さいたま市	10世紀前半	無関	7.2	Ⅰ a	4	
24	氷川神社東・氷川神社・B-17号	H19・20	さいたま市	10世紀前半	不明	2.1	Ⅰ	2	
25	氷川神社東・氷川神社・B-17号	H19・20	さいたま市	10世紀前半	無関	3.1	Ⅰ a		
26	氷川神社東・氷川神社・B-17号	H19・20	さいたま市	10世紀前半	不明	2.9	Ⅱ	15	
27	氷川神社東・氷川神社・B-17号	H19・20	さいたま市	10世紀前半	無関	6.5	Ⅰ a	3	
28	氷川神社東・氷川神社・B-17号	H24	さいたま市	10世紀前半	不明	4.1	Ⅰ	10	
29	氷川神社東・氷川神社・B-17号	H43	さいたま市	10世紀前半	無関 ?	4	a		
30	氷川神社東・氷川神社・B-17号	Aブロック	さいたま市	10世紀か	不明	3.6	Ⅰ	5	
31	氷川神社東・氷川神社・B-17号	Aブロック	さいたま市	10世紀か	無関	8.2	Ⅰ a	9	
32	稲荷前 (A区)	1 号小鍛冶	坂戸市	10世紀初頭	不明	4.6	Ⅱ	16	
33	揚樋木	56号住	狭山市	9 世紀後半	無関	16	a	30	
34	揚樋木	82号住	狭山市	9 世紀末	無関	7.4	a	31	
35	宮ノ越	6 号住居跡	狭山市	9 世紀後半	環状関か	17.6	Ⅲ d	29	
36	田子山遺跡 (第41・42地点)	50号住居跡	志木市	9 世紀中葉	不明	3.3	Ⅱ		
37	椿山	第 3 号古墳跡	蓮田市	6 世紀前半	無関	7.2	Ⅲ a	24	
38	椿山	22号住居跡	蓮田市	9 世紀後半	不明	3	Ⅱ	12	
39	椿山	20号住居跡	蓮田市	9 世紀後半	台状関か	3.3	Ⅲ c ?		
40	椿山	19号住居跡	蓮田市	9 世紀末	不明	3	Ⅰ	1	
41	竹之城	110号土塋	鳩山町	古代	不明				
42	向谷	道路遺構	日高市	9 世紀か	台状関か	15.4	Ⅲ c	25	
43	如意	表採	深谷市	不明	台状関	16	Ⅲ c		
44	如意	205号住居跡	深谷市	9 世紀後半	段関か	6.3	Ⅱ b ?	18	
45	宮西	7 号住居跡	深谷市	11世紀	無関	5.8	Ⅰ a	6	
46	大寄	I 区114号住居跡	深谷市	8 世紀初頭	台状関	13	Ⅲ c	32	
47	大寄	II 区131号住居跡	深谷市	10世紀後半	環状関	9.6	Ⅱ d	22	
48	六反田	1 号住居跡	深谷市	9 世紀後半か	不明		Ⅱ ?		写真のみ
49	北通第33地点	28号住居跡	富士見市	8 世紀後半以前	段関	8.2	Ⅱ b	20	
50	雷電下	一括土器出土地点	本庄市	8 世紀前半	不明	8.8	Ⅰ a	8	
51	将監塚・古井戸	H117号住居跡	本庄市	9 世紀中頃	段関	3.1	Ⅰ d	11	

矢柄を伴った鉄鏃356はⅢ c ③類、357はⅡ c ②類、348はⅢ d ①類に分類される。Ⅰ類は八木崎遺跡（第284図7）・雷電下遺跡（8）から8世紀中葉には存在し、11世紀まで存続する。氷川神社東遺跡例（9）のような大形品も存在するが、概して刃部幅の狭い小型品①類が多いようだ。Ⅱ類は富士見市北通遺跡例（20）から遅くとも8世紀後半には出現している。反町遺跡出土357に類似する資料は上里町中堀遺跡例（21・23）が挙げられる。やや浅めの挟りで台状関を有する。21は9世紀後半の資料で時期的な齟齬はない。

Ⅲ類は蓮田市椿山遺跡3号墳から6世紀前半（24）、大寄遺跡から8世紀前半の資料が出土している（32）。前者は共伴関係が不確定で、後者は刃部の開きが狭くやや異質であるが、台状関が備わっている。時期の確定できる資料は9世紀以降のもので、反町遺跡356には日高市向井谷遺跡（25）・熊谷市一本木前遺跡（26）が類似しようか。但し、両例とも関の形状が不鮮明である。熊谷市諏訪木遺跡例（27）は台状関の一種と思われ、多量の祭祀遺物を伴う河川跡から出土しており、反町遺跡例と性格的にも類似する可能性がある。反町遺跡358は環状関を持つ資料で、東松山市山王裏遺跡例（31）が好例である。山王裏遺跡例は出土土器から9世紀前半に位置付けられ、時期的な齟齬はない。伊奈町戸崎前遺跡例（28）も環状関をもつ例であるが、残念ながら時期的な特定ができない。狭山市宮ノ越遺跡例（29）は環状関の一種とすべきか、台状関に含めるべきか悩むところであるが、いずれにせよ9世紀後半の資料で反町遺跡雁股鏃の補強資料といえる。

結局、雁股鏃の形態変遷から時期的に限定することは困難である。しかしながら、9世紀は雁股鏃が増加する段階であり、反町遺跡出土雁股鏃がいずれも9世紀代の資料と考えても齟齬はないことが確認できた。

雁股鏃は元来、狩猟生活に適した中央アジアで

発生し、多様な形態に発達した後日本に伝わったことが指摘されている（末永前掲書・関前掲書）。したがって当初から形態分化が顕著であった。ところで、雁股鏃は「鏃矢にはすべて雁股を装する」（末永1941）と指摘されるように鳴鏃をつけた儀礼用上差矢（うわざしや）と認識されてきた（註5）。反町遺跡出土の雁股鏃も儀礼用の用途と見てよからう。特に大形の356は矢柄が篋被の下方にずれて出土しており、鏃の存在を想定することも可能である。

神事の復元

以上出土遺物の検討から、神事は9世紀後半代に執り行われたと推定した。神事の場合となった第3号溝跡と第36号溝跡の間は古墳時代後期の住居跡が1軒あるのみで、古代の遺構は検出されなかった。調査時には祭祀スペースとして固定化されたためではないかと考えたが、古墳時代前期から後期、奈良・平安時代にかけて汀線が変更したことが判明した。そのため奈良・平安時代において、居住域にするには地盤が安定していなかったためと考えた方がよいのかもしれない。いずれにせよ、第3次調査の成果から河川流路がヘアピン状に大きく屈曲する部分に当たり、祭祀場として非居住域の流路変更点が選択されたことは注意しておきたい。

調査区外に祭祀関連遺構が延びていた可能性も捨てきれないが、「神矢」・「弓」墨書が両端に位置することから、この中で祭祀は完結したと考えておきたい。墨書土器を含めて、供膳器が8点、漆パレットが1点、長頸瓶が1点、土師器甕が1点となる。漆パレットが祭祀に一役買っていた可能性もあり、そうすると欠落するのは「弓」そのものとなる。「東大寺献物帳」には弓の構造記載として「背黒漆腹赤漆」、「黒漆鮎皮斑」などが見られ、塗漆弓は一般的であったと思われる。祭祀の重要なアイテムの一つは「漆」弓であったのだろう。鳴鏃を装着した「神矢」を川に向かって射

掛けたのはまさしく「弓」であった。

神矢墨書土器の周辺からは、刺網の木製「浮子」と土鍾がまとまって出土した。「刺網」が置かれていたと考えて誤りない。年代測定は今回実施していないため未知数ではあるが、祭祀に伴う可能性もあると考えている。岸边に並べられた須恵器坏には土師器甕で炊いた米と刺網で獲った魚、長頸瓶に入れられた酒が神に献じられ、祀りの一シーンとして神矢を射掛けたのであろう。

（２）第３号溝跡第２号祭祀跡について 出土状態

第36号溝跡の北側に位置する第３号溝跡の北岸と流路内から墨書土器がまとまって出土した。「三田万呂」が北岸から４点、流路内から１点、「飯万呂」が流路内から２点である。遺物の遺存度は36号溝跡の祭祀遺物に比べて明らかに低く、また原位置から河川内に流れ込んだ遺物が多いように思われた。

「飯万呂」は須恵器坏、「三田万呂」は須恵器坏と無台碗があり、供膳器の構成と岸边に土器を並べるという形態は第36号溝跡の第１号祭祀跡と共通する。

年 代

第２号祭祀跡の須恵器坏は口径12.4cm～13.2cm、底径は6.7cm～8.5cm、底部は回転糸切り後回転ヘラケズリ調整されている。形態から渡辺編年HⅢ期後半～HⅣ期古段階頃の資料と見てよい。須恵器無台碗もつくりがしっかりしており、同一段階において違和感はない。推定年代は８世紀中葉～後半に措定されよう。

第36号溝跡の第１号祭祀跡と比較すると凡そ１世紀近い年代差が存在することになる。遺物の依存状況の差がその年代差に反映されていると見ることもできる。河川岸边に墨書土器を並べるという意味では酷似するが、墨書内容は異なり、第２号祭祀跡は「三田万呂」、「飯万呂」という人名と思われる墨書が記載されていた。また、流路内か

らは鉄鏃は発見されておらず、祀りの形態も同一とはいえない。

墨書土器

「飯万呂」と「三田万呂」は万呂が共通することから親子・兄弟など血縁関係にある名前と思われるが、土器そのものから先後関係、親子関係を導くことは聊か難しいが、敢えて言えば、飯万呂の記された須恵器坏の方が口径・底径の縮小化がみとめられ新出の要素を有していようか。

墨書そのものの表現方法に注目すると「飯万呂」墨書のうち、１点（87）は字形が不明瞭であるが、「飯万呂」と読んで誤りないだろう。「三田万呂」は字が全体に大きく、稚拙な98とその他に二分され、万呂の書き方から89と90・97に分かれると見ることができる。三田万呂に関しては少なくとも２人、または３人の筆者の存在を想定することができる。

どのような人物であったのかは不明であるが、おそらく祭祀を主宰した人物の名前ではなかったか。土器にみられる様相差が生きたとすれば、「三田万呂」から「飯万呂」に祭祀の主宰者が引き継がれたことになる。

いずれにせよ、都幾川の織り成す広大な可耕地を掌握した有力な在地豪族の存在が想定される。更にいえば、第１号祭祀跡に継続するとするならば、９世紀後半に至るまでその勢力を保っていた郡司級の在地豪族を想定することもできよう。

（３）類例の検討とまとめ

第１号祭祀跡・第２号祭祀跡について記してきたが、今のところ、律令期の河川祭祀跡としては類例に乏しい。反町遺跡の西側に隣接する城敷遺跡からは古墳時代の流路跡（反町遺跡と同一流路の可能性もある）が検出され、５世紀末葉頃の完形土師器坏類と、故意に破碎された須恵器樽形甕が投棄されたような状態で出土している（註６）。城敷遺跡と同様な例は深谷市城北遺跡第５号祭祀跡でも確認される。城北遺跡例は時期的にはほぼ

同一で、「遺物のほとんどは破片で、河川の肩から河中へ投棄された」状態で出土した（山川1995）。石製模造品を伴わない点でも類似している。

県内の河川祭祀跡としては熊谷市西別府祭祀遺跡（湯殿神社祭祀遺跡）が著名である。古代幡羅郡家の存在が確実視される幡羅遺跡の一角に位置し、河川流路と湧水点がある。古墳時代後期の馬形・人形や横櫛形などの石製模造品と、律令期の土器が多量に出土している。遺物様相から7世紀中葉以降11世紀に至るまで祭祀が行われたと推定されている。また、多量の土錘が出土しており、報告者は漁労における豊漁を祈願して供えられた祭祀用具の一つと指摘している（松田2000）。反町遺跡の刺網の意義を考える際の参考となるが、注意されるのは律令祭祀である「祓え」の儀式に使用されたとされる斎串が今のところまったく出土していない点である。

小敷田遺跡（熊谷市・行田市）の河川跡の傍らに位置する第105号土壌からは木簡とともに、鳥形、横櫛が出土している。7世紀末から8世紀初頭頃に位置付けられ、西別府祭祀遺跡の石製模造品祭祀を継承したあり方ともいえるようか。

斎串を伴う河川祭祀は小敷田遺跡に近接する熊谷市諏訪木遺跡が挙げられる。諏訪木遺跡では河川跡C地点第1・第3祭祀跡及びF地点から木製形代（斎串・人形・馬形）が、河川跡B地点からは雁股鍬が出土している（吉野2001）。

都城では6月・12月晦日に罪・穢れを形代に移し、流路に流す「大祓」を行うことが神祇令に定められている。平城京内の河川跡から木製形代が多量に出土している。地方でも兵庫県袴狭遺跡からは5000点を超える木製形代が出土しており、但馬国府に関わる祭祀場の存在が想定されている（鈴木他2000）。しかし、武蔵国の斎串の出土例は非常に少なく、諏訪木遺跡以外では東京都足立区伊興遺跡から斎串が出土する程度である（佐々木1999）。

このように川辺に土器を並べる反町型の祭祀遺跡の類例は極めて乏しい。雁股鍬がまとまって出土する祭祀遺跡としては、大阪府吹田市五反島遺跡が唯一管見に触れた。五反島遺跡からは河川跡などから15本の鉄鍬が出土し、5本は雁股鍬、内2本には鳴鏑が残存していた（西本他2003）。五反島遺跡の性格については、天皇即位の翌年に行われる「八十島祭」に関わるのではないかとの説もある（吹田市立博物館2003）重要な祭祀遺跡である。鳴鏑の付いた雁股鍬は当然祭祀用に使用されたと考えられ、反町遺跡の補強材料にはなるだろう。

文献資料からの類例は『山城国風土記』逸文に「丹塗矢」の記載がある。河と弓矢というキーワードからストレートに検索できる文献資料はない。また、現象的には現代も「おびしゃ」などとして神社などで行われる的射の民俗例に近いものがあるが、河川というキーワードが結びつく例は殆どなく、古代まで遡る証拠がないのが実情である。

「神矢」墨書に伴う河川祭祀の性格は解明できなかったが、今後も類例の探索に努め性格の究明を課題としたい。（富田和夫）

註

- 1 その他にも、第3次調査の結果、溝の流路や規模など当時の想定とは異なる部分が出ている。
- 2 口径は口唇部を結ぶ接線としたため報告書実測図から再計測した。報告書は口縁部最大径を口径としている。
- 3 第3次調査S D 48は今回報告のS D 48の西側延長部に相当する。委託者が異なるため後年度別途報告となる。
- 4 その他にも挟りや側縁の形状（内湾・外反）などの要素もあるが、複雑多岐にわたるため今回の分類には含めなかった。また、方頭斧矢形との区別が難しいものもある。
- 5 飯塚武司（飯塚前掲書）、関 義則は全て儀礼用の用途ではなく、小型で、身幅の狭い雁股鍬は征矢（そや）であったことを指摘している（関前掲

書)。今回分類で言えば、Ⅰ①類・Ⅱ①類となろう 6 当事業団で調査した。現在整理報告書作成中である。

引用・参考引用文献

- 青木和明・千野浩 1987『長野吉田高校グラウンド遺跡』長野市教育委員会 長野市遺跡調査会
赤熊浩一 1988『将監塚・古井戸 歴史時代編Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第71集
赤熊浩一・岡本健一 2004『下田町遺跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第296集
赤熊浩一・瀧瀬芳之 2006『下田町遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第319集
赤熊浩一 2002「14. 比企郡」『坂東の古代官衙と人々の交流』埼玉考古学会
赤熊浩一・上野真由美 2007「東松山市反町遺跡の調査」『第40回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会
甘粕 健 1976「三千塚古墳群に関する覚え書」『北武蔵考古資料図鑑』校倉書房
飯島克巳・若狭徹 1988「樽式土器編年の再構成」『信濃』第40巻第9号 信濃史学会
飯塚武司 1991「鉄鍬—その時代性と地域性—」『研究論集 X 創立10周年記念論文集』東京都埋蔵文化財センター
石川安司他 1994「比企郡市における中世の概観」『比企郡市における埋蔵文化財の成果と概要』
石岡憲雄 1980「北武蔵の玉作遺跡」『研究紀要第2号』埼玉県立歴史資料館
石坂俊郎 1995『田島・棚田』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第147集
石坂俊郎 2005「五領遺跡出土土器の今昔」『研究紀要第27号』埼玉県立歴史資料館
磯崎 一・中山浩彦 2006『下田町遺跡Ⅳ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第320集
磯崎 一・山本 靖 2005『北島遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第305集
井上尚明 1994『光山遺跡群』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第137集
井上尚明 2001「古代神社遺構の再検討」『研究紀要』第16号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
井上 肇 1978『舞台（資料編）』埼玉県遺跡発掘調査報告書第17集 埼玉県教育委員会
井上 肇 1979『舞台（本文編）』埼玉県遺跡発掘調査報告書第18集 埼玉県教育委員会
井上 肇 1980『根平』埼玉県遺跡発掘調査報告書第27集
今泉泰之 1974『駒堀』埼玉県遺跡発掘調査報告書第4集 埼玉県教育委員会
今泉泰之他 1979『田木山・弁天山・舞台・宿ヶ谷戸・附川』埼玉県遺跡発掘調査報告書第5集 埼玉県教育委員会
今井 宏他 1980『児沢・立野・大塚原』埼玉県遺跡発掘調査報告書第28集
今井 宏他 1982『緑山遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第19集
岩瀬 謙 2003『如意遺跡Ⅳ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第285集
内田正英 2007「川越市古海道東遺跡（第1次）の調査」『第40回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会
馬橋泰雄 1994『足洗遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第136集
梅沢太久夫他 1981『六反田』岡部町六反田遺跡調査会
江原昌俊 1993『岩鼻遺跡（第2次）』東松山市文化財調査報告書第21集 東松山市教育委員会
江原昌俊 1996「いわゆる「小代氏館跡」の区画について」『比企丘陵』第2号 比企丘陵文化研究会
江原昌俊他 2004『上松本遺跡（第2次）』東松山市遺跡調査会発掘調査報告書第2集 東松山市遺跡調査会
江原昌俊 2005「13. 高坂周辺遺跡」『シンポジウム埼玉の戦国時代 検証比企の城』
太田賢一 1998「吉見町三ノ耕地遺跡の調査」『第31回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会
太田賢一 2003『下遺跡』吉見町遺跡調査会発掘調査報告書
太田賢一 2005『西吉見条里遺跡—第1分冊—』吉見町埋蔵文化財調査報告書第2集 吉見町教育委員会
大谷 徹・宅間清公 2006『杉の木遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第327集
大塚孝志 1988『椿山遺跡—第5次調査—』蓮田市文化財調査報告書第12集
大塚 実他 1988『八幡・原山・古吉海道』東松山市文化財調査報告書第17集

- 岡田勇介・上野真由美 2007『東野／平沼一丁田』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第360集
- 尾形須敏他 1997『志木市遺跡群Ⅷ』志木市の文化財25集
- 尾形須敏 1999「いわゆる『比企型坏』の編年基準の要点」『あらかわ』第2号
- 尾形須敏 2008「古墳時代後期の土師器研究の再認識－（仮称）「入間系土師器」の実態と生産地推定を例として－」『埼玉考古』第43号
- 書上元博 1996「古墳時代前期の土器群について」『新屋敷遺跡C区』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第175集
- 柿沼幹夫・宅間清公・的野善行 2005「岩鼻遺跡（第2次）出土の「岩鼻式」土器について」『紀要』30 埼玉県立博物館
- 柿沼幹夫 2006「岩鼻式土器について」『土曜考古』第30号
- 柿沼幹夫 2007「2 土器研究 後期土器編年一県北部・西部地域」『埼玉の弥生時代』六一書房
- 柿沼幹夫・佐藤幸恵・宮島秀夫 2008「岩鼻式土器から吉ヶ谷式土器へ」『国土舘考古学第4号』
- 加藤恭朗 1985 a『附島遺跡』附島遺跡発掘調査報告書Ⅰ 坂戸市教育委員会
- 加藤恭朗 1985 b『附島遺跡』附島遺跡発掘調査報告書Ⅰ 坂戸市教育委員会
- 加藤恭朗・北堀彰男・柳楽 理 1987『古代のさかど』坂戸市遺跡発掘調査概報Ⅰ 坂戸市教育委員会
- 加藤恭朗・北堀彰男・柳楽 理 1988『坂戸市遺跡群発掘調査報告書第Ⅰ集』 坂戸市教育委員会
- 加藤恭朗 1988 b『附島遺跡』附島遺跡発掘調査報告書Ⅲ 坂戸市教育委員会
- 加藤恭朗他 1992『坂戸市史』古代資料編 坂戸市教育委員会
- 加藤恭朗 1994『若葉台遺跡』若葉台遺跡発掘調査報告書Ⅲ 坂戸市遺跡発掘調査団
- 加藤恭朗 1997『景台遺跡』景台遺跡発掘調査報告書Ⅲ 坂戸市遺跡発掘調査団
- 加藤恭朗 1999『景台遺跡』景台遺跡発掘調査報告書Ⅱ 坂戸市遺跡発掘調査団
- 加藤恭朗 2001『柵遺跡』柵遺跡発掘調査報告書Ⅰ 坂戸市遺跡発掘調査団
- 加藤恭朗 2005『若葉台遺跡』若葉台遺跡発掘調査報告書Ⅵ 坂戸市教育委員会
- 加藤恭朗 2008「入間郡家を推定する－6世紀・7世紀から8世紀初頭の遺跡の動向をもとに－」『論叢古代武蔵國入間郡家－多角的視点からの考察－』古代の入間を考える会
- 金井塚 厚 1990『山下窯跡』鳩山町埋蔵文化財調査報告第7集
- 金井塚良一他 1962『三千塚古墳群発掘調査－中間報告－』三千塚古墳群調査会
- 金井塚良一 1965「埼玉県東松山市吉ヶ谷遺跡の調査」『台地研究No.16』台地研究会
- 金井塚良一 1968『番清水遺跡調査概報』埼玉県遺跡調査会報告第1集
- 金井塚良一 1968『柏崎古墳群－埼玉県東松山市柏崎古墳群発掘調査報告－』考古学資料刊行会
- 金井塚良一 1971「五領遺跡B区の発掘と五領式土器についてのわれわれの見解」『台地研究No.19』台地研究会
- 金井塚良一他 1978『吉見町史』上巻 吉見町
- 金井塚良一 1979「比企地方の前方後円墳－北武蔵の前方後円墳の研究（1）」『研究紀要第1号』埼玉県立歴史資料館
- 金井塚良一ほか 1981『東松山市史資料編第1巻 原始古代・中世 遺跡。遺構・遺物編』
- 金井塚良一・渡辺久生 1981「東松山市下寺前遺跡発掘調査報告」『台地研究No.21』台地研究会
- 金井塚良一・高柳茂 1987『船川遺跡』船川遺跡調査会
- 金子彰男 2004『愛染遺跡第6・7・8・9・10地点 青柳古墳群元阿保支群』神川町遺跡調査会報告第7集
- 金子直行 2002『八木崎遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第281集
- 川島町 2006『川島町史資料編 地質・考古』
- 菊地 真 2006「東松山市反町遺跡（第1次）の調査」『第39回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会
- 菊地 真 2007『西浦／野本氏館跡／山王裏／銭塚』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第340集
- 菊地 真 2007『都幾川下流域の埋没微地形と遺跡立地（予察）』『研究紀要第22号』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 久々忠義・塚田一成 2003『桜町遺跡発掘調査報告書弥生・古墳・古代・中世編Ⅰ』小矢部市埋蔵文化財報告書第51冊

- 木戸春夫 2003『宮西遺跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第288集
- 木村俊彦 1986「滑川町新井・打越遺跡の調査」『第19回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会
- 栗岡 潤 2007『白井沼遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第328集
- 栗原文蔵・野部徳秋・今泉泰之 1973『岩の上・雉子山』埼玉県遺跡発掘調査報告書第1集 埼玉県教育委員会
- 黒坂禎二 1989『上組Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第80集
- 黒坂禎二 1998『富士見一丁目遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第189集
- 黒坂禎二 2008『牛原／御新田／番匠・下道／横沼新田／北谷』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第353集
- 黒沢 浩 2004「神奈川県二ツ池式出土弥生土器の再検討ー「二ツ池式土器」の提唱」『明治大学博物館研究報告第8号』
- 黒沢 浩 2004「五領遺跡出土土器の再検討に向けて」『明治大学博物館研究報告第9号』
- 小出輝雄 1988「北通遺跡第33地点」『富士見市遺跡群Ⅵ』富士見市文化財報告38集
- 小久保徹・利根川章彦 1981『桜山古墳群』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第2集
- 古代の入間を考える会 2008『論叢古代武蔵國入間郡家一多角的視点からの考察ー』
- 後藤守一 1940「正倉院御物矢」『人類学雑誌』第55巻10号
- 小淵良樹 1982『宮ノ越遺跡』埼玉県遺跡調査会報告第44集
- 小淵良樹 1986『狭山市文化財調査報告書4 揚櫓木遺跡』狭山市文化財報告12
- 小峰啓太郎 1963「杉の木遺跡の調査」東松山市文化財調査報告書第2集 東松山市教育委員会
- 埼玉県 1982『埼玉県史 資料編2 原始・古代 弥生・古墳』
- 埼玉県教育委員会 1988『埼玉の中世城館跡』
- 埼玉県教育委員会 1994『埼玉県古墳詳細分布調査報告書』
- 埼玉県教育委員会 1994『埼玉のオビシヤ行事』
- 埼玉県教育委員会 1996『埼玉県埋蔵文化財調査年報 平成6年度』
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2006『さいたま埋文リポート2006』年報26 平成17年度
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2006『さいたま埋文リポート2007』年報27 平成18年度
- 斉藤国夫 1980『長野中学校校内遺跡発掘調査報告書』行田市文化財調査報告書第9集
- 斉藤 稔 1994『一天狗遺跡ーT地点発掘調査報告書ー』鶴ヶ島市教育委員会
- 斉藤 稔 1999『一天狗遺跡J地点13区発掘調査報告書』鶴ヶ島市教育委員会
- 斉藤 稔 2001『羽折遺跡1次調査発掘調査報告書』鶴ヶ島市埋蔵文化財調査報告第48集
- 酒井清治 1982『緑山遺跡出土の瓦ー勝呂廃寺の系譜の中でー』『緑山遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書19集
- 酒井清治 2002『古代関東の須恵器と瓦』同成社
- 坂戸市 1983『坂戸市史原始史料編』
- 坂本和俊・金子彰男 1986「諏訪山29号墳」『埼玉県古式古墳調査報告書』埼玉県史編さん室
- 坂本和俊 1990「関東1 東京・埼玉・神奈川」『古墳時代の研究 第11巻』雄山閣出版
- 佐々木彰 1999『伊興遺跡Ⅱ』足立区伊興遺跡調査会
- 澤口和正 2008『宮裏遺跡』宮裏遺跡発掘調査報告書Ⅰ 坂戸市教育委員会
- 塩野 博 2004『埼玉の古墳 北足立・入間』さきたま出版会
- 塩野 博 2004『埼玉の古墳 比企・秩父』さきたま出版会
- 寺社下博 2000『一本木前遺跡』平成11年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書
- 篠田泰輔 2008『木曾免遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第352集
- 篠原祐一 2005「水辺の祭祀小考」『古代東国の考古学』
- 嶋村一志・長瀬出 2000『豊島馬場遺跡Ⅱ』北区埋蔵文化財調査報告第25集 北区教育委員会
- 島村範久 2001「騎西（私市）城跡」騎西町史考古資料編

- 島村範久 2001「多賀谷氏館跡」騎西町史考古資料編
- 下城 正 1994『新保田中村前遺跡Ⅳ』群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第176集
- 下城 正ほか 1988『三ツ寺Ⅰ遺跡』上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第8集
- 吹田市立博物館 2003『古代祭祀を語る－五反島遺跡と古代祭祀』
- 末永雅雄 1941『日本上代の武器』
- 杉崎茂樹 1993『中耕遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第125集
- 杉原莊介 1971「五領遺跡出土の土器」『土師式土器集成本編1』東京堂出版
- 鈴木敬二他『袴狭遺跡』兵庫県文化財調査報告書第197冊
- 鈴木孝之 1991『代正寺・大西』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第110集
- 鈴木徳雄 1983「古代北武蔵における土師器製作手法の画期」『土曜考古』第7号
- 関 義則 1993「雁股鋳について」『氷川神社東遺跡・氷川神社遺跡・B-17号遺跡』大宮市遺跡調査会報告 第42集
- 高崎光司 1990『玉太岡遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第90集
- 高橋一夫 1977「比企郡鳩山村出土の須恵器」『埼玉考古』第16号
- 高橋好信他 1994「比企郡市における古墳時代の概観」『比企郡市における埋蔵文化財の成果と概要』
- 立花 実 1992「東日本の口縁屈曲鉢」『西相模考古第1号』西相模考古学研究会
- 立石盛詞 1987『女堀Ⅱ・東女堀原』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第68集
- 立石盛詞 1989『御伊勢原』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第79集
- 田中広明・末木啓介『中堀遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第190集
- 谷井 彪 1978『山田遺跡・相撲場遺跡』埼玉県遺跡調査会報告第18集 埼玉県遺跡調査会
- 谷井 彪 1974「Ⅵ花影遺跡の発掘調査」『南大塚・中組・上組・鶴ヶ丘・花影』埼玉県遺跡発掘調査報告書第3集
- 谷井 彪 1974「Ⅳ舞台遺跡の発掘調査」『田木山・弁天山・舞台・宿ヶ谷戸・附川』埼玉県遺跡発掘調査報告書第5集
- 谷井 彪 1979『大山』埼玉県遺跡発掘調査報告書第23集
- 千賀 久 1988『寺口・忍海古墳群』新庄町文化財調査報告書第1冊 新庄町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所
- 千野浩ほか 1998『小島柳原遺跡群 水内坐一元神社遺跡』長野市の埋蔵文化財第88集 長野市埋蔵文化財センター
- 千野浩・町田勝則 2001『長野吉田高校グランド遺跡Ⅱ』長野市の埋蔵文化財第97集 長野市埋蔵文化財センター
- 津田福治・小峰啓太郎ほか 2002『尾崎遺跡』川島町遺跡発掘調査報告書第1集
- 津野 仁 「古代・中世の鉄鋳」『物質文化』第54号 1991
- 寺内正明 1994『ささら遺跡 殿の下遺跡 馬込八番遺跡』蓮田市文化財調査報告書第22～24集 蓮田市教育委員会
- 戸沢久則・千葉敏朗・石川正行・小川直裕・秋本雅彦 2006『下宅部遺跡Ⅰ』東村山市遺跡調査会
- 富田和夫 1982『伴六』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第11集
- 富田和夫 1992『稲荷前遺跡（A区）』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第120集
- 富田和夫 1994『稲荷前遺跡（B・C区）』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第145集
- 富田和夫 2000『大寄遺跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第268集
- 富田和夫 2002「飛鳥・奈良時代の官衙と土器－官衙的土器と搬入土器の様相－」『坂東の古代官衙と人々の交流』埼玉考古学会
- 富田和夫 2002『熊野遺跡（A・C・D区）』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第279集
- 富田和夫 2005「東松山市城敷・銭塚（第2次）遺跡の調査」『第38回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会
- 富田和夫・赤熊浩一 2006「日本の遺跡・世界の遺跡 埼玉県東松山市反町遺跡」『考古学研究』第53巻3号
- 富田和夫 2007「埼玉県東松山市反町遺跡出土の祭祀関連遺物について」『祭祀考古学』第6号 祭祀考古学会
- 富元久美子 1993『堂ノ根遺跡第1次調査』飯能市遺跡調査会発掘調査報告書8
- 富元久美子 1994『飯能の遺跡（16）張摩久保遺跡第20次調査ほか』飯能市内遺跡発掘調査報告書11

- 富元久美子 1997『新井原・榎戸遺跡』笠縫土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書1 飯能市遺跡調査会
- 富元久美子 2005『八幡前・若宮遺跡(第1次調査)』川越市遺跡調査会調査報告書第31集
- 永井智教 2002『西吉見古代道路跡』西吉見条里Ⅱ遺跡発掘調査概報 吉見町教育委員会
- 中平 薫 1993『向谷 宿方』日高市埋蔵文化財調査報告第22集
- 中山浩彦 2005『白井沼遺跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第315集
- 西本安秀他 2003『吹田市五反島遺跡発掘調査報告書 遺物編』吹田市教育委員会
- 西川制・斉藤稔 1981『脚折遺跡群発掘調査報告書』鶴ヶ島市教育委員会
- 日本考古学協会新潟大会実行委員会 1993『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会
- 橋本 勉 1999『戸崎前Ⅱ／薬師堂根Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第218集
- 坂野和信 1987『下道添遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第67集
- 比企地区文化財担当者研究協議会 1994『比企郡市における埋蔵文化財の成果と概要』
- 久田正弘・大西 顕ほか 2002『宇ノ気町指江遺跡・指江B遺跡』石川県埋蔵文化財センター
- 日高市 1997『日高市史』原始古代資料編
- 平野寛之 2008「古代入間郡家の復元に向けて―川越市霞ヶ関遺跡群の再検討―」『論叢古代武蔵國入間郡家―多角的視点からの考察―』古代の入間を考える会
- 昼間孝志 1989『金井遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第86集
- 福田 聖 1992「鍛冶谷新田口遺跡出土土器の分析―前篇―」『研究紀要第9号』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 福田 聖 1999『V結語 2. 古墳時代』『上ノ宮遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第252集
- 福田 聖 2005「古墳時代前期の出土土器について」『北島遺跡XⅢ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第305集
- 福田 聖 2007「川島町富田後遺跡の調査(第1・2次)」『第40回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会
- 福田 聖 2007『Vまとめ 3. 古墳時代』『久台遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第339集
- 福田 聖 2008『九宮1／九宮2』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第343集
- 福田 聖・永井いずみ 2002『大寄遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第280集
- 増田逸郎 1979『雷電下・飯玉東』埼玉県遺跡発掘調査報告書第22集
- 松田 哲 2000『西別府祭祀遺跡』熊谷市教育委員会
- 松本 完 2003「後期弥生土器形成過程の―様相―」『埼玉考古』第38号
- 水村孝之 1982『桜山窯跡群』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第7集
- 宮井英一 2007『日枝神社遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第344集
- 宮島秀夫 1989『岩鼻遺跡』東松山市文化財調査報告書第18集 東松山市教育委員会
- 宮島秀夫 1990『下寺前遺跡(第2次)』東松山市文化財調査報告書第19集 東松山市教育委員会
- 宮島秀夫 1991『大門遺跡(第1次)』東松山市文化財調査報告書第20集 東松山市教育委員会
- 宮島秀夫 1992『4137 見入遺跡』『埼玉県埋蔵文化財調査年報』平成2年度 埼玉県教育委員会
- 宮島秀夫・江原昌俊 2003『杉の木遺跡(第3次)』東松山市文化財調査報告書第24集
- 宮島秀夫 1995「銅釧・鉄剣出土の方形周溝墓」『比企丘陵創刊号』比企丘陵文化研究会
- 宮島秀夫 1999『古凍14号墳(第1・2次)』東松山市文化財調査報告書第23集
- 宮島秀夫・江原昌俊 1993『岩鼻遺跡(第2次)』東松山市文化財調査報告書第21集
- 宮島秀夫・江原昌俊 2003『杉の木遺跡(第3次)』東松山市文化財調査報告書第24集
- 宮瀧交二 1999「一天狗遺跡と出土墨書土器について」『一天狗遺跡J地点13区発掘調査報告書』鶴ヶ島市教育委員会
- 宮本直樹他 2002『町内遺跡Ⅲ』岡部町埋蔵文化財調査報告書第7集
- 村上達哉 2002『新堀遺跡第1～8次調査』笠縫土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書2
- 村田健二 1982『竈田・鶴田』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第20集
- 村田健二 1984『古凍根岸裏』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第37集

- 村田健二 1990『広面遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第89集
- 村田健二 1992『桑原遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第121集
- 森岡秀人・西村歩 2006「古式土師器と古墳の出現をめぐる諸問題」『古式土師器の年代学』（財）大阪府文化財センター
- 山川守男 1995『城北遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第150集
- 山本 禎 1991『山王裏・中原遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第98集
- 山本 禎 1995『山王裏遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第167集
- 山本 禎 1997『山王裏／上川入／西浦／野本氏館跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第184集
- 山本 禎・岩瀬 譲 2002『如意Ⅲ／川端』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第276集
- 弓 明義 1995「吉見町大行山遺跡の調査」『第27回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会
- 弓 明義 1997「吉見町三ノ耕地遺跡の調査」『第30回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会
- 弓 明義 2002「吉見町西吉見条里Ⅱ遺跡の古代道路跡」『坂東の古代官衙と人々の交流』埼玉考古学会
- 横山千晶・大木紳一郎ほか 1999『小八木志志貝戸遺跡群1』群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第256集
- 吉田 稔 1991『小敷田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第95集
- 吉野 健 2001『諏訪木遺跡』熊谷市遺跡調査会埋蔵文化財報告書
- 吉野 健 2002『前中西遺跡Ⅱ』埼玉県熊谷市教育委員会
- 嵐山町 『丘陵人の叙事詩—嵐山町の原始・古代—』嵐山町博物誌第四巻・考古・歴史編
- 若松良一・山川守男・金子彰男 1987『諏訪山33号墳の研究』
- 若松良一・大谷徹・高田大輔 2000『堂地遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第266集
- 渡辺 一 1988『鳩山窯跡群Ⅰ—窯跡編（1）—』鳩山町教育委員会
- 渡辺 一 1990『鳩山窯跡群Ⅱ—窯跡編（2）—』鳩山町教育委員会
- 渡辺 一 1991『鳩山窯跡群Ⅲ—工人集落編（1）』鳩山町教育委員会
- 渡辺 一 1992『鳩山窯跡群Ⅳ—工人集落編（2）』鳩山町教育委員会
- 渡辺 一他 1994「比企郡市における古代の概観」『比企郡市における埋蔵文化財の成果と概要』
- 渡辺 一 1995『竹之城・石田・皿沼下遺跡』鳩山町埋蔵文化財調査報告第17集
- 渡辺 一 2006「須恵器の流通を巡る諸問題—生産地の立場から—」『埼玉考古学会50周年シンポジウム 古代武蔵国の須恵器流通と地域社会』埼玉考古学会
- 渡辺久生・宮島秀夫 1983「1417 沢口遺跡」『埼玉県埋蔵文化財調査年報』昭和56年度 埼玉県教育委員会
- 渡辺久生・宮島秀夫 1988『八幡・原山・古吉海道』東松山市文化財調査報告書第17集 東松山市教育委員会
- 渡辺久生・宮島秀夫 1996『観音寺遺跡（第4次）』埼玉県東松山市遺跡調査会調査報告書第1集
- 渡辺正人 1993『氷川神社東遺跡・氷川神社遺跡・B—17号遺跡』大宮市遺跡調査会報告第42集